

# 関係性についての一考察

——贈与の視点から『千と千尋の神隠し』をよむ——

金子 亮 太

## 論文要旨

本論では「贈与」によって生まれる「関係性」について考察する。現代の心理臨床においては、人と人との関係を意識せずにはいられない。今日のこのころの病とは他者との関係そのものの失調であるときえ言える。河合（2004）は、現代人の病理が“関係性喪失の病”として現れることを指摘しており、またこの関係性の喪失は神話の喪失に他ならないとする。ここで言う「関係性」とは、単に対人的な関係を示すのではなく、個人の根源的な帰属意識やアイデンティティの基盤となるものであり、現代においてはそれが希薄になっているとの指摘である。また、神話は無意識的な経験知の体系として帰属意識やアイデンティティの根元たるコミュニティを形成すると考える。ここから、関係性が希薄になることと神話が失われることは表裏一体であるといえる。帰属意識やアイデンティティを形成するコミュニティが解体したことで、他者との結びつきも必然的に衰退したのである。

ところで、Mauss（1925/2008）は古代的社会における贈与が互恵的な関係を生み出すことを記述している。そこでは贈与が他者との関係性を結ぶものであったと考えられる。贈与とは、実在性やエネルギーの受け渡しであり、またその関係性そのものである。贈与によって、〈自〉と〈他〉は向かい合い、そこには体験やイメージが生み出され、〈自〉の主体感覚が生成されていく。また、それは同時に〈自〉／〈他〉の境界を再定義することでもある。〈自〉という主体が〈他〉という未知性・異質性と交わることで、ひるがえって〈自〉の同一性再認識することでもある。

贈与によって〈自〉は再構成され新たな可能性に開かれる。しかし、これは同時に〈他〉という未知性・異質性と交わることで主体はコントロールを失い、〈自〉が〈傷〉つき〈死〉にさえ直面する危機的な体験でもある。古代的文化においては、神話は経験知の体系として、コミュニティへの帰属意識として、このような〈傷〉つきにさえ意義を与えるものであったといえる。しかし、神話の失われた現代では、〈自〉の再構成する過程の中で主体は不可避に〈傷〉を負うこととなる。関係性の失われた現代において、心理臨床はこの〈傷〉つきの問題に向かい合わねばならない。

**キーワード**【贈与、関係性、神話、交換、傷】

## 1、はじめに

### (1) 関係性について

現代の心理臨床においては、人と人との関係を意識せずにはいられない。今日のこのころの

病とは他者との関係そのものの失調であるときと言える。河合(2004)は、現代人の病理が“関係性喪失の病”として現れることを指摘しており、またこの関係性の喪失は神話の喪失に他ならないとする。ここで言う「関係性」とは、単に対人的な関係を示すのではなく、個人の根源的な帰属意識やアイデンティティの基盤となる相互作用であり、現代においてはそれが希薄になっているとの指摘である。

河合(同上)は関係性について以下のように述べている。“天空に輝く太陽を見たとき、どのような民族であれ、その不思議さに心を打たれたことであろう。…人間の特徴は、そのような体験を、自分なりに「納得」いのゆくこととして言語によって表現し、それを他人と共有しようとすることである。…言葉が組み合わさって、ひとつの物語を生み、物語という一種の体系を共有するのである。そのようにして「世界観」ができあがってくるが、同じ世界観を共有する集団もそれに伴って生じてくる”として、彼は、世界との関係性によって体験が生まれ、またその体験の共有によって物語という世界観や集団が成立することを示している。また、“「神話」によって、部族の成員たちは、自分たちのよって立つ基盤を得、ひとつのまとまりをもった集団として存続してゆける”のである。世界との関係性は、ひいてはその集団の成員の根源的な基盤となることが示唆されている。

しかし、現代において神話は失われ、それは“関係性喪失の病”として現われているという。それは、他者と切り離されてしまうために“孤独に陥る”ことであり、“自分は偉大なものによって守られている、という安心感”や“家族としての真の「関係」”失うことであり、ひいては“近づいてくる死に対してどう考えていいかわからない”というような生と死の“つながり”を持ってないことでもあるという。現代において、世界との関係性やそこから派生する神話や民族性が失われているということは、根源的な帰属意識やアイデンティティが失われていると考えることができよう。

## (2) 贈与について

Mauss(同上)は古代的社会の中での贈与に着目し、贈答によって“全体的給付組織”という不可分の組織が構成されることを指摘している。また、このようなやりとりは単純な経済的価値以上のものであり、常に、挨拶、饗宴、奉仕、舞踊等をもなつて、宗教的、社会的、呪術的、法律的、道徳的意義をもつものであるということを、Maussは強調している。

Malinowski(1922/2010)は、より具体的に、トロブリアンド諸島で行われているクラを観察した。クラとは部族間で広範に行われる贈与の一形式である。それは、閉じた環をなす島々の大きな圏内に住む、多くの共同体のあいだで行われる。ソウラヴァと呼ばれる赤色の貝の長い首飾りは時計回りに、ムワリという白い貝の腕輪は逆回りに、部族間の交換によって常に回り続けている。このような品物の移動や取引の細部は、すべて一定の伝統的な規則と慣習によって決められており規制されている。また、クラの行事のいくつかは、伝統的な

呪術儀礼と公的な儀式をとまなう。例えば、クラの取引きはきまった相手とだけで行われることを定められている。彼らは友人としてふるまい、おたがいにクラをする義務があり、そのおりに他の贈物をも交換する。この共同関係は、一生つづくものであり、様々な特権や相互的義務を含み、一種の大規模な部族関係をなしている。

ここから、贈与によってある種の「関係性」が構築されることが示唆されているといえる。古代的な贈与を検討することで、関係性についてより具体的に考察することが可能であると考えられる。

贈与そのものの意義に関する心理学的な考察は数少ない。成田（2003）は神話や昔話に登場する贈与について考察している。彼は“神々から人間への贈り物が神々と人間との隔たりを告げ、人間はその運命から逃れられないことを告げるものであるのに対し、人間から神々への贈り物は神々との隔たりを埋め、交流し、神々を宥めその好意を引き出すことによっていくばくなり運命を変えようとする試みである”としている。ここでは贈物がどのようなものでそれによってどのような結果が生み出されるのかについて鋭く考察されているが、贈る側と贈られる側との関係性については触れられていない。贈与によって生み出される関係性とはどのようなものなのか。

クラにおいては民族間で伝統的に受け継がれた信仰の対象となる品物がやりとりされており、また、民族間の結婚もまた女性の生命的生産力のやり取りだとする考えがある。贈与においてやりとりされるのは、このような信仰心や生命力といった実存性やエネルギーである。これらのやりとりによって、民族の伝統や繁栄が連綿と繋がれていくのである。つまり、贈与とは、実存性やエネルギーをやりとりすることで、そこに民族への帰属意識やアイデンティティといった主体感覚を生成する関係性なのだと考えられる。

同時に、贈与は、自民族や主体としての個人の埒外のものである、他民族や他者——より広義には世界や神々——と行われることにその命題がある。自民族や主体を〈自〉とし、他民族や他者を〈他〉とするならば、〈自〉／〈他〉の間でやりとりされることに意義があると言える。なぜなら、〈他〉という自身の埒外のものから得たものでなければ、それは真に新しい可能性を得ることにはなりえないからである。ただし、これは〈他〉の流入によってそれまでの〈自〉としてのアイデンティティが一度破壊されることでもある。それは時に〈自〉が〈傷〉つくことであり〈死〉ぬことであるときえいえる。贈与とは、〈他〉の流入によって〈自〉という主体を再構成する関係性だとも考えられる。

贈与と交換は対照的な概念である。交換と比較することで、贈与の特徴はさらに明確になろう。贈与においては、そこで構築される関係性が重視されるのに対して、交換においては、交換される物品の価値や等価性が重視される。やり取りの間に等価性が認められているということは、そこに共通する価値観が存在しているということである。価値観や共有されている関係には〈自〉／〈他〉の差異性は生まれえず、たとえやり取りが行われたとしても主体

が新たな価値観という可能性に触れえない。つまり、交換では〈自〉としての在り様が崩されることはなく、〈自〉／〈他〉の関係性は構築されず、やり取りは贈与たりえないのである。

### (3) 物語について

具体的に贈与が生み出す関係性の検討を行うにあたって、スタジオジブリが1999年に発表したアニメーション映画『千と千尋の神隠し』を取り上げる。筆者が担当した事例を検討する中でクライアントの贈物が大きな要因となったのだが、その際にインスピレーションを受けたのがこの物語であった。事例の検討を深めるためにも、まずこの物語を検討してみたい。

主人公千尋は小学4年生の少女である。物語は彼女が転校して両親と転居先へ向かう車の中から始まる。その途中、一家は道に迷い込み神々の湯治場へと足を踏み入れることになる。そして、この物語には贈与が頻繁に登場するのである。冒頭で主人公である千尋は友だちから贈られた花束を手をしている。また、神々の住処に足を踏み入れて体が消えそうになる際にはハクという少年から丸薬を贈られているし、湯治場へ来客した水神からはニガダンゴを贈られている。そして、物語の最後ではゼニイバから髪留めを贈られるのである。この物語に登場する贈物は、関係性を生み出し主人公のアイデンティティを形成していくものという意味で、贈与であると考えられるのである。

この作品はこれまでも臨床心理学の観点からさまざまに考察されている。山中(2002)は“人が人を信頼するとはどういうことか？人が人を愛するとはどういうことか？そういった人間関係の根源的なことがさりと描かれている。…人間が一番なくてははいけないこと、しかも今一番、みんなが忘れてしまっていて、一番廃れてだめになっていることを描き出し物語の中で回復させている”として、現代に失われたものを癒す物語だとする。また、岩宮(2011)は“自立に向かう子どものこころのなかではどんなことが起こっているのか”として、物語のエピソードを児童の精神世界として考察している。本論では贈与という観点からこの物語をとりあげる。

## 2、物語

### (1) 失われた関係性——体験、主体感覚、イメージ——

先に述べたように『千と千尋の神隠し』は主人公千尋が転校する場面からはじまる。彼女は両親と車で引っ越し先に向かいながら、友人たちからもらったと思われる饞別の花束を抱えている。そして、道すがら新たに通うことになる学校に向けてべっつと舌を出し「前のほうがいいもん」と不満をあらわにしている。彼女が転校を好ましく思っていないことは明らかである。物語ではその冒頭に欠落しているものがひとつのテーマとなりやすい。岩宮(同

上)は、これを“子供が思春期に入ろうとしている不安定な移行の時期のイメージ”としてとらえているが、筆者はこれを千尋がこれまでに培った関係性が失われていると考える。彼女に花束を贈ってくれた友人たちとの関係が、友人たちとともに過ごした日々の思い出や体験が、過去のものになりつつあるのである。

ここで、河合(2004)のいう関係性について、もう一步踏み込んで検討しておきたい。彼が例に挙げている太陽について考えれば、関係性とは個人と太陽という対象を結ぶ糸のようなものである。自分と太陽、自分と他者、自分と偉大なるもの、自分と家族、自分と死、というように、個人と対象を結ぶものである。そして、その個人と対象を結ぶ糸とは、太陽を見て心打たれるような〈体験〉であると考えられる。個人が世界と結ばれる〈体験〉は、“自分は偉大なるものによって守られている、という安心感”や“近づいてくる死に対してどう考えていいかわからない”というような恐怖感さえもたらすのである。世界との関係性の中から、安心感や恐怖感といった情緒を体験し、個人は自身の感覚に触れることができる。それによって個人は何をもって自分自身であるのかを認識するともいえよう。太陽や他者という世界と向き合っている個人は、その関係性を〈体験〉することで〈主体感覚〉ともいえるものを得ていると考えることができる。

川崎(2010)は、“心理療法において第一義的に重要なのは、…来談者が語る「内容」そのものではなく、その「内容」と来談者の関係性、すなわち、来談者がその「内容」をどのように体験したかであり、さらに体験とはイメージにほかならない”と、関係性について述べている。体験や主体感覚とは詰まる所イメージそのものであり、このようなイメージが民族レベルなどで共有され蓄積されていくことで物語や神話が生成されるのだと考えられる。この意義において、神話は経験的知識の体系であると言える。

千尋はそれまでの友人や生活環境を失うことによって、自身と世界とを結ぶ関係性を失い、つまりはこれまでに培ってきた主体感覚を失っていると考えられる。関係性の喪失とは、個人の生活する世界の喪失であり、働きかける対象の喪失であり、ひいては個人の主体感覚の喪失である。それは〈自〉の喪失であったと言い換えてもいい。ここでいう〈自〉とは、彼女が拠り所としていた自明の世界や自身のアイデンティティである。〈自〉を失うことによって世界の境界は揺らぎ、千尋はトンネルを抜けて異界へと足を踏み入れていく。

## (2) 与えられるもの——実在性、エネルギー——

トンネルを抜けた世界に夜が訪れると川には水が満ちて千尋は帰れなくなってしまう。ここで千尋の体が消えてしまいそうになるが、これは千尋が関係性を失ってしまい主体的な感覚を失ってしまっている状態が身体レベルでイメージされていると考えることができる。これを助けるのがハクという少年が与える薬のようなものである。これによって千尋の体は実体感を取り戻す。ハクという他者とのやりとりによって、千尋は主体感覚をおぼろげに取り

戻すのである。その後もハクは千尋におにぎりを与えているが、ここではおにぎりを食べて安心しきった千尋が泣き出してしまう。これは喪失の危険にさらされていた主体感覚が実際の身体的なレベルから情緒的なレベルへと内化していく様子であると考えられる。それは、異界において両親を失ったかなしみというだけでなく、現実において同級生との関係を失ったかなしみでもあったといえよう。そして、主体感覚を生成していくという意味で、これら葉やおにぎりはハクから千尋への贈与であったと捉えることができる。ここにおいて、贈与は関係性という相互作用を生み出し、それを受け取る者に身体のような実在性や情緒のようなエネルギーといった主体感覚を与えるものであると考えられる。

古代的な贈与の観察からもこのことは裏付けられる。Malinowski (同上) は、クラによってまわり続けるこれらの物品は“崇拝の対象”であり、それらを所有することは“それ自体うれしいこと、こころの安まること、ほっとすること”であることを指摘している。クラは関係性を形成すると同時に、その贈与物によって信仰心や安心感といった情緒を得る行為であるといえる。また、Levi-Strauss (1967/2000) は、オーストラリア、中国、インド、といった地域の婚姻規則の観察から、婚姻様式の基礎となる構造を導き出している。彼は女性の生命的生産力を普遍的な認識として、婚姻を“互酬性”を生み出すものだと考えた。彼の定義する“互酬性”とは“経済的実利品であるだけでなく、それとは別次元の現実性をもったもの、すなわち威力、権力、共感、身分、情動などの媒体”をやりとりすることである。ここでも婚姻という関係性において、生命力をはじめとする実在性、ひいては主体感覚が形成されることが示唆されている。

贈与は、その行為自体がすでに関係性そのものなのである。それは、異なる部族同士を向かい合わせ、結び合わせ、そこに関係性を構築する。同時に、贈与とは、かけがえのない相手に自分のかけがえのない何かを手渡す行為なのである。関係性の基盤の上に信仰心や生命力といった実在性やエネルギーが受け渡しされる。そして、贈与されたそのものが、ひいては主体感覚を形成していくと考えられよう。

千尋はハクが存在によって癒され、ハクに働きかけられることによってかろうじて自身の感覚を保ったといえる。以降も、千尋は登場人物とのやり取りの中で自身の役割や居場所——出自としての主体感覚——を見出していく。たとえば、カマジイは黒焼きという何かの干物によって千尋が働けるように手配をしている。とはいえ、千尋はまだ自身のほんとうの居場所を見出したとは考えにくい。千尋は湯屋で働くためにユバアバと契約を結ぶことになるのだが、この契約において千尋は名前の「尋」の字を失う。白川 (1978) は“すべてのものは、名をもつことによってはじめて具体的な存在となる”ことを指摘している。古代中国では一定年齢に達すると氏族の一員としての名が与えられるが、それは祖霊によって決められたという。名前の一部を失った千尋はやはり〈自〉としての主体感覚の一部を失っているといえる。山中 (同上) がこの名前を失うエピソードを“自分が自分でなくなってしまうこと”と

指摘するように、これは主体性が失われている様子が文字や名前という象徴的なレベルでイメージされていると考えられる。

### (3) 〈他〉との出会い——異質性、差異性——

ここにおいて、主体としての〈自〉に相對する〈他〉の存在が肝要になる。〈他〉の存在こそが、ひるがえって〈自〉としての同一性をより強固にするがためである。〈自〉とは抛り所となる自明の世界や自身の同一性であり、自身が所属する部族でもあるといえる。一方の〈他〉とは、自分自身であるという同一性の範疇の外側に存在するものであり、自身の所属しない部族だといってもいいだろう。この物語において〈他〉としてのイメージを示すのはクサレガミである。

クサレガミとの対峙は、正に臭いもの汚いものを認識する体験である。臭いものとは、自分の近寄りたくないもの、自分から遠ざけておきたいもの、自分の埒外のものである。そして、自分が臭いと思うものを認識できるということは、自分とそれ以外のものを選び分けられるということであり、言い換えれば主体である〈自〉と主体以外のものである〈他〉という境目が生まれ始めているといえる。河合（1998）が“アイデンティティーは同一性と同時に差異性を含んでいる”とするように、臭い、汚い、という忌避したい対象を認識できるということは、逆説的にそれを認識できる主体感覚が芽生えていると考えられるのである。

千がクサレガミを洗う中で、その体に刺さったとげのようなものを抜くとゴミの山があふれ、そこに清らかな水の神が現れる。クサレガミという忌避したい対象に関わり続けた結果神が現れるのである。それは清浄な川の神であり、臭さとは対照的な清らかさである。後述するように、後に千は川に落ちた記憶を思い出すことで主体性を完全に取り戻すが、この物語における清らかな水とは主体を生み出すもの包むものとしての実在性やエネルギーであると考えられ、臭さや汚さのように自分とは異なるものとしての〈他〉として存在するものではない。泥にまみれ、異質なものである〈他〉に交わり続けることによって、同時に同一性としての〈自〉というべき新たな主体感覚、つまり水神のイメージが現前したのだと考えられる。千は〈他〉にかかわり続けたことで、〈自〉としての新たな実在性を手にしたのである。

### (4) 神々の現前——死、神話——

結果、水神という新たな主体感覚を得たものの、千のように臭いものへのコミットしていくことには大きな勇気が必要である。クサレガミの臭さたるやご飯を一瞬にして腐敗させてしまうほどの脅威である。そこへ関わっていくには汚れることを厭わない覚悟が必要になる。〈他〉と関わり続けることで〈自〉は新たな可能性を手にすることが出来るものの、それはそれまでの〈自〉／〈他〉の境界を一度壊して再構成していくことであるともいえ、主体にとって恐怖を伴うことでさえあるといえる。現実においては、転校という事態に臨んで

千尋が新たな関係性を作ることを余儀なくされていたこととパラレルにとらえることができる。

古代的な贈与は部族間を結びつけて相互扶助のような関係性を生み出すだけでなく、それを行うこと自体が榮譽であると考えられた。Mauss (同上) はポトラッチという贈与の形態を記述している。ポトラッチとは贈与の競い合いである。贈与し合う者同士がお互いにかに盛大な贈与を行うかを競うのである。無論、贈り手はかけがえのない何かを贈り、一方、ポトラッチでは受け手は贈られた贈物を受け取ると同時に破壊さえする。これらはどちらも、己の無私無欲を示す行為であるといえる。つまり、自分にとってかけがえのないものを手放し、受け取った自分のリソースとなるものを破壊さえして、自身を投げ打つことを怖れない姿が賞賛されたのである。それは自分自身を殺すことのできる者こそが英雄だったのだと言い換えてもいい。

自分を殺すことがなぜ榮譽となるのか。それは——千が泥にまみれたように——〈自〉を殺し〈他〉と交わることを受け入れることが、新たなエネルギーや可能性の獲得であるからに他ならない。ポトラッチは精霊や神々への供儀を捧げるためのものでもあった。絶対的な〈他〉としての神々に贈与することによって、食物や天候といった恩恵を授かろうとするのである。ただし、これは決して神々の力を我が物にしてコントロールしようとするものではない。力を持っているのは常に神々であり自然である。ポトラッチに参加する酋長は、彼らの祖先や神を代表しその化身となる。つまり、彼ら自身が神々と一体となるのである。彼らは己を捨てて神々と一体となることで、その力に授かろうとするのである。人間さえ神々や自然といった大きな力の一部であり、それを自死によって体現することでこそ、食物を得たり天候にあずかるといった自然の力の循環を期待できたのである。それは〈自〉を殺すことによって〈他〉の力の流入を受け入れる行為である。敢えて人間の個としての〈自〉を捨て去ることによって〈自〉の限界を覆すものであるとも言えよう。

贈与とは、〈他〉と関係性を持つことによって〈自〉に新たな主体感覚を生み出すものである。それは、〈自〉という自明の存在を超えて〈他〉という未知の存在に直面する行為であり、〈他〉という異質性との交わりによって〈自〉という存在を再定義する行為である。ここで、意識に対する無意識を“無意識とはむしろ主体の求める意味を破っていつているもの”であり“無意識は人間主体に層構造的に含まれている深みではなくて、むしろそれに相対立する他者”(河合 1998 同上)と定義するならば、〈自〉／〈他〉という分節は意識と無意識のそれであると捉えることも可能である。

ただし、逆に言えば、〈自〉が〈他〉と接触して交じり合うということ——つまり贈与を行うということ——は、主体にとっては恐怖を伴うのである。〈他〉との交合によって主体が再構成されていくことは、それまでの〈自〉としての枠組みが崩されることを意味している。それは主体が〈傷付く〉ことであり、それまでの〈自〉が〈死ぬ〉ことであるといつて

もいい。

ここで、神話はこのような〈自〉／〈他〉の境界を乗り越えていく橋渡しをしていると考えられる。神話には自らを投げ打って贈与を繰り返してきた祖先たち英知が語り継がれ、また、神々は人間の思考の及ばない完全な他者でありつつも、同時に血縁によって結ばれた民族の祖霊でもある。〈他〉の流入という痛みの果てに、祖霊や神々との出会いが待ち受けていることを神話は体験やイメージとして教えてくれるのである。それは死の恐怖を緩和するといった類のものではない。死を恐怖しながらもそれを受け入れること、それ自体に価値が見出されているのである。今日神話が失われているとするならば、このような〈自〉／〈他〉の、ひいては意識と無意識の、境界の乗り越えは〈自〉という主体が死にかねない危機的な恐怖を伴うといえる。

千の関わりという贈与に対してクサレガミはニガダンゴを贈り返す。それは、混沌とした泥の中から生まれた塊——つまり主体性——であり、また〈苦い〉ものであつてクサレガミの臭さ——つまり他者性——でもある。このニガダンゴは、〈他〉との交わりによる主体感覚の形成や〈自〉／〈他〉の境界の生成という一連のイメージを象徴的に凝縮させたものであると考えられるのである。そしてこのニガダンゴがその後の物語を展開させる鍵になっていく。

## (5) 贈与と交換

水神との出会いを経ても千はまだ名前を取り戻すにはいたらない。彼女にはまだ仕事が残っているようである。それは交換の象徴としてのハクとカオナシの問題であり、ひいては彼女が負った〈傷〉の問題である。

心理療法においては夢などのイメージを検討する際に、そこに現れる登場人物を本人の無意識と捉えることがある。イメージの中の登場人物は、個人が統合できていないもしくは受け入れられていないような特徴——つまり無意識——が、他者として現れていると考えられる。それは個人の影であり分身といってもいい。文字通り、無意識は他者として現れるのである。イメージの中の他者は、個人とは全く逆の性格であつたり個人に寄りそのような存在であつたり様々であるが、そのような他者と接することによって個人は自身の新たな側面や可能性を見出していく。この物語そのものを千尋がみている夢やイメージとして捉えるならば、ハクもカオナシも千尋の一部であり、千が新たな可能性を見出すためのイメージであると考えていくことが出来る。

先にも触れたが、ハクは千尋に贈与をした人物であり、千尋もまたコミットしようとする相手である。一方のカオナシは、千尋がハクと出会った直後から登場していたものの、ここまで顔をのぞかせる程度で千尋とはまったく接触していない。千と関係を持っているのか持っていないのかという点においては、まさしく白（ハク）と黒（カオナシの様相から想像

に難くない)のように正反対な登場人物である。しかし一方で、この両者には重要な共通点がある。ハクは名前を忘れてしまったがために帰り道がわからなくなっており、カオナシもまた千が「お家はどこの」「お家がわからないの」と問いかけたように帰る場所を失っていると考えられるのである。名前を失い帰る場所を失っているというイメージは——湯屋というイメージの世界であれ現実の世界であれ——千尋にも共通するものであり、ハクとカオナシを通して、失われた関係性という問題が繰り返されているのである。

また、この二者にはもう一つ重要な共通点がある。ハクは——映画の中では詳しく語られてはいないが——自分の居場所を失ったために魔法の力を手に入れようとユバアバと契約を結んでいる。一方のカオナシは薬湯の札や砂金を用いて千に関わろうとしている。これらは対価による関係の構築である。これは〈交換〉という言葉に集約することができよう。ハクはユバアバへの奉仕の対価として魔法という技術を手に入れようとしており、カオナシは札や砂金といった媒体を使うことによって千との関係性を手に入れようとしている。ハクとカオナシを通して、千は〈交換〉の問題に直面していると考えることができよう。

交換と贈与とは対照的な概念である。贈与においては、そこで構築される関係性が重視されるのに対して、交換においては、交換される物品の価値や等価性が重視される。というよりも、等価性を求めるやりとりでは〈自〉／〈他〉の関係性が構築されず、贈与たりえないのである。

贈与と交換の対照性を捉えるのにあたっては、やはり古代的な文化を参照していくことが有意義であろう。Malinowski (同上)によれば、トロブリアドにおいて対価を求めるようなやり取りは、贈与であるところのクラに対してギムワリと呼ばれ、明確に相違が認められているものである。贈与と交換の相違のひとつには返報性があげられる。贈与においては直接的な返報は期待できない。贈物に対しては等価のお返しをしなければならないが、その場で相互に交換することはありえない。また、贈与への返礼としての品物の見積もりは返礼をする人にまかされていて、いかなる強制もしてはならないとされている。お返しとしてももらった品物が等価でないとき、受けとった人は落胆し憤慨するが、これを救う方法はなく、相手に強要したり、すべての取引を停止したりすることはできない。一方の交換は、やり取りされる物品の等価性が前提とされる関係性である。そのため手渡した物品に対して同等の価値のものがすぐさま返される。

贈与では相手に直接的な返礼を求めることが出来ない。それは〈自〉が〈他〉という未知のものに境界を越えて自身を投棄するがゆえである。贈与の場では、自身の経験としてこれまでに培われた規則や一般性などはまったく機能せず、贈った相手の規則や価値判断にすべてを委ねなくてはならない。返礼として送られてくるものは、贈った側の価値判断には必ずしもそぐわず、贈った側は無を言わずそれを受け入れなくてはならない。これは神々への贈与を考えれば明白である。神々は人知を超えた力を持ち、気まぐれに施しを与え、気まぐ

れに天災を起こすのである。神々からの恩恵を受けるには、その力にすべてを委ねなくてはならない。〈自〉としての価値観を壊し、〈他〉の価値観を受け入れることで初めて、〈他〉からのエネルギーの流入を得るのである。〈自〉としての価値観が殺されることに贈与の意義があり、〈自〉が殺されないことには贈与たりえないといっても過言ではない。一方の交換では、やりとりされる物品の等価性は保証されており、〈自〉〈他〉がともに認める価値観の元に取り引が行われる。そこでは〈自〉としての価値観が揺らぐことはない。

だからこそ、贈与の規範をやぶるようなことがあるとギムワリのように贈与を行ったとして批判を受ける (Malinowski 同上) と言えるし、贈与は返礼を求めるための行為となるやいなや“侮蔑の対象”となり“面子”(127) すなわちトーテムの面をつける権利を汚すこととなる (Mauss 同上) のだと考えられる。交換として確実な返礼を求める行為は、〈自〉の価値観が揺らぐことはなく、それは〈自〉が生き長らえるための行為であるとさえいえよう。返礼を求めること自体が、〈自〉の同一性を覆してゆく贈与の存在意義に根本的に反しているのである。そのような行為は、力の源泉である〈他〉としてのトーテムをおざなりにし、貶め、蹂躪する行為となりうる。

贈与の世界では、〈自〉と〈他〉は常に入りまじり反転させようような関係にある。贈与の世界では、そのサイクル自体が意義である。しかし、贈与によって〈自〉の同一性が覆されることは、主体にとっては〈傷〉付きであり死でさえある。交換の関係では自身が未知のものにさらされて傷つく可能性がなく、その観点からすれば交換は贈与の否定だといえよう。贈与の関係には自身を投棄する恐怖が付きまとい、そこには贈与の否定としての交換が常に身を潜めていると考えられる。

ハクとカオナシが交換の象徴として千の前に現れたと捉えるならば、おまえは交換をするつもりはないのか、おまえは〈傷〉を負う覚悟があるか、と、彼女は無意識から問われていと考えられる。そしてここで登場するのがニガダンゴである。千がハクとカオナシに関わる様子がニガダンゴの贈与という形で表現される。ハクはユバアバの双子の姉であるゼニバの契約のハンコを盗んだことによって呪いを受け瀕死の重傷を負っているのだが、千がニガダンゴの半分を食べさせたことによってハンコと呪いを吐き出して一命を取り留める。これは、ニガダンゴによって千の影であるハクがハンコを吐き出すことによって交換(契約)という関係性のあり方を否定したとみることができよう。一方のカオナシは砂金に群がった湯屋の働き手や大量の食べ物を飲み込んで肥大化してしまっている。交換(砂金)による関わりは、相手を呑み込む(所有する)か吐き出す(所有しない)というものにしかなりえないのであろう。千はカオナシにもニガダンゴを食べさせる。ここで砂金を差し出して関係を迫るカオナシに対して、彼女は「わたしが欲しいものはあなたには絶対に出せない」といつて断るのである。これは自身の影としてのカオナシ、つまり対価によって関係を結ぼうとすることを拒否したと見て取ることができる。ここでいう彼女が「欲しいもの」とは贈与による

関係性であろう。彼女は失った関係を、対価による交換ではなく贈与によって結ぶことを決意したと考えることが出来る。こうしてカオナシもまた交換によって得た関係である人や食べ物物を吐き出して、千に統合されていく。ニガダンゴとは、〈自〉に対しての臭さや苦さ、つまり〈自〉を傷つけ得る真の他者性の象徴であったと考えられる。その苦さを呑み込んだハクとカオナシ——ひいては千——は、交換による関係を否定して贈与による関係性を求めたのである。

物語はいよいよ終わりに向かい、千は最後の旅に出る。

## (6) 関係性を取り戻す——傷、名前——

交換の象徴としてのハクとカオナシと関わったことで、異界での体験は終わりに向かうようである。千とカオナシはハクを許してもらうためにゼニイバのもとへ向かう。

交換による関係性を捨て去り、純粹に関係を求めて「さびしい」と訴えるだけに戻ったであろうカオナシは、今は彼女の傍にただただ身を置いている。これは千が関係性を失ったかなしきを受け入れた様子であるとも考えられる。転校というかたちでそれまでに培ってきた関係性を失って、千尋はカオナシのようになんかしていたのだろう。それは、文字通りカオ(貌)がナシ(無)になってしまう程に、己の主体感覚を失ってしまう程に、である。かなしみの余り、彼女がカオナシのように物を差し出すことで新しい関係性を求めたとしてもおかしくはない。しかしながら、千はカオナシがおこなったような交換による関係性を否定し、これまでの関係性を失ったかなしきを受け入れ、新たに関係性を築いていく恐怖を引き受けたのである。それは彼女にとっての〈傷〉つきであったといえよう。カオナシという影を引き連れることで、千は自身の〈傷〉を負ったのだと考えられる。

水面の上を滑るように走る電車にのって、千とカオナシはゼニイバのもとへ向かう。カオナシはゼニイバのもとに留まり、交換によって関係性を求める千尋の影はイメージの世界の奥深くに還って行ったのだといえる。カオナシを贈り還した返礼のように千はカオナシとゼニイバが結った髪留めを受け取るが、これは千がカオナシと関わったことの証だと考えられる。交換の象徴であったカオナシは、全く相容れないものとして、触れてはならないものとして、禁止の対象として、悪として、排除されていたわけではない。千はカオナシという自身の影と対峙し、交わり、関係性を失ったかなしきや新たな関係性を築く恐怖と向き合ったのである。この髪留めこそが、カオナシとの、影との、無意識との、関係性の証なのである。これによって、千は髪(頭、たましい)を結いなおすのである。

カオナシとの別れをすませると、白龍となったハクが千を迎えにくる。ハクの背に乗って帰る途中、千は幼いころに河で溺れた記憶を思い出す。それは河の神であったハクに助けられた体験であった。前述のとおり、この物語における水のイメージは主体を生み出し包む実在性であり、より原初的な一体感としてのアイデンティティ体験を象徴していると考えられ

る。それは千尋の根源的な主体感覚が回復される体験であったといえる。ここで、ハクは「ニギハヤミコハクヌシ（饒速水琥珀主）」という神としての名を取り戻し、ハクという影が名前を取り戻したことによって千尋の名前も取り戻され、彼女の主体は完全に取り戻されるのである。失われていた千尋の「尋」の字は両手に呪具を持って祝詞によって神の所在をたずねるといふ意味がある（白川同上）。それはまさしく、贈与する相手としての、無意識としての、他者としての、神々の復権であり、その関係性の回復である。

そして千尋の関係性が回復されたいま、異界は必然的にその役目を終えて閉じられていく。自分の名前という主体感覚を取り戻した千尋は、〈自〉／〈他〉の、意識と無意識の境界を取り戻したのである。トンネルを抜けて現実世界に戻ったのちに千尋は一度だけトンネルを振り返る。現実世界に戻った千尋が新しい世界を拒むということは最早あるまい。向き直った千尋の髪にはあの髪留めが光るのである。

### 3、帰結として

#### (1) 〈自〉と〈他〉、意識と無意識

今回の物語では、主人公千尋が交換を否定し贈与の関係性へと開かれていったといえる。贈与とは、実在性やエネルギーの受け渡しであり、またその関係性そのものである。贈与することで〈自〉と〈他〉は向かい合い、そこには体験やイメージが生み出され、〈自〉の主体感覚が生成されていく。また、それは同時に〈自〉／〈他〉の境界を再定義することでもある。〈自〉という主体が〈他〉という未知性・異質性と交わることで、ひるがえって〈自〉の同一性を再認識することでもある。

しかしながら、交換による関係であつてもそれは安易に否定されるべきものではない。贈与によって際限なく〈自〉／〈他〉の境界が薄れた状態では、逆に主体は同一性を保持できないためである。〈他〉という無意識は常に傍らにあるものではあるが、常にそれと交わっているわけではない。神々と交わる祝祭もまた冬などの一定の期間に限定されることが常であるように、千尋が〈自〉としての主体感覚を再構成したのちには、ハクが言う通り『後ろを振り返ってはいけない』のである。異界への、無意識への扉は安易に開かれるものではない。

Bataille (1957/1973) は、ある種の禁止を破ることは自意識の崩壊でありエロスや死に触れることであると考え、“連続性のなかで引き裂かれ消滅する存在の充血と、孤立した個体を維持しようとする意志との対立は、変化を通じて幾度も現れる”としている。贈与という〈他〉受け入れることと、交換という〈自〉の保持は、対立しながら揺れ動くものといえる。人は他律的な運命に縛られながらも、一方でそれに抗おうとする自律的な意志を捨て去ることも出来ない。人が〈自〉／〈他〉を分かたれた存在であつて〈自〉／〈他〉の“互酬性”

(Levi-Strauss 同上) をその本質とするならば、人は〈自〉という意志の保持発展と〈他〉という運命の流入を常に迫られた弁証法的存在であるといえる。

先に述べたように、贈与における〈自〉／〈他〉の関係性は、心理学における意識と無意識の関係性にとらえることが可能である。すなわち、贈与とは意識と無意識が向き合う体験であり、関係性とは意識と無意識の接触だと捉えることができる。そして、“関係性喪失の病”とは、個人が他者との関係性を失っているということだけでなく、意識と無意識の接触が絶たれている状態だと考えることができる。〈自〉のような意識が唯一のものとして存在し続けるとき、それは〈他〉としての無意識のような新たな可能性を受け容れない固定化したものとなる。固定化した意識は新たな主体感覚を生み出さない。関係性から主体感覚を取り戻すには、意識は無意識との接触が不可欠である。意識と無意識が接触することではじめて、意識は繰り返し再定義され、そこから新たな可能性を見出していくといえる。しかしまた、無意識という可能性に常に開かれているばかりでは、そこには意識の同一性は見出されないのである。意識は無意識に接し体験やイメージを獲得することで、また無意識を排除することで、意識は主体たりうるのである。無意識との交わりによって意識が主体感覚を見出すのであれば、意識と無意識の境界は常に更新され続ける動的なものである。無意識という未知のものに翻弄されながらも、そこに自身の主体感覚を選び取って初めて、主体は生きた主体となり得るといえよう。ひとつの可能性に固執せず、新たな可能性を模索しながら、その中に主体としての意志を再び選び取っていくのである。

## (2) 傷つくこと

しかしながら、贈与による関係性は〈自〉という意識に死をもたらすことでさえある。贈与によって〈自〉と〈他〉が交合することで、それまでの主体としての〈自〉の枠組みは破壊され〈傷〉を負う。この意味で、贈与とは、自己にとって未知なるものや自己にはコントロール不可能な他律性に身を委ねることであるといえる。それは〈自〉が死ぬことであるとさえいい。古代においては神話という経験知の体系によって自死にさえ意義が見出されてきたが、神話が失われたとされる現代においては主体は必然的に〈傷〉を負うこととなろう。神話の知が失われた現代においては、〈傷〉つくことに意義が見出されにくいと言い換えてもいい。

現代の心理療法にあつては、そのような〈傷〉にいかに向き合うかが問題となろう。そのための手がかりを、この『千と千尋の神隠し』は提示している。千が傷つきながらも関係性を求めたのは、そこにハクという存在があったからである。

彼は、千尋にとって交換の象徴として未知の存在でありつつも、やはり異界において千尋を救った存在である。丸薬を与え、おにぎりを与え、主体を失いそうになっていた千尋を助けたのは彼である。彼の贈与によって、彼との関係性によって、千尋は主体感覚を取り戻し

たのである。だからこそ、彼が傷つくときには千尋は苦労や傷みを顧みずに彼を救おうと奔走するのである。先に、神々の存在について「人間の思考の及ばない完全な他者でありつつも、同時に血縁によって結ばれた民族の祖霊でもある」と述べたが、この意味でハクはまさしく神なのである。千尋にとって、他者でありながらも結ばれた存在だと言える。ハクとの関係性がある初めて、千尋は傷つくことを厭わずに他者を求めていく覚悟ができたのだと言えよう。つまり、ハクのような他者でありながら結ばれた存在、そのようなイメージや無意識を見出ししていくことこそが、主体が関係性に開かれていくための手がかりとなると考えられる。

### 引用文献

- Bataille, G.: *L'EROTISM*. 1957. (澁澤龍彦訳: 『エロティシズム』, 二見書房, p204. 1973)
- Levi-strauss, c. : *Les Structures elementaires de la parente*. 1976. (福井和美訳: 『親族の基本構造』, 青弓社, pp279-773. 2000)
- Mauss, M.: *Essai sur le don*. 1925. (有地亨訳: 『贈与論 新装版』, 勁草書房, pp26-127. 2008)
- Malinowski, B. K.: *Argonauts of the Western Pacific*. 1922. (増田義郎訳: 『西太平洋の遠洋航海者』, 講談社学術文庫, pp142-344. 2010)
- 岩宮恵子: 「臨床風景に現れる『千と千尋の神隠し』—自己意識が生まれる10歳」, (こころの科学 (158), pp2-7. 2011-7)
- 岩宮恵子: 「学校現場のオクサレサマとカオナシ」, (こころの科学 (159), pp116-122. 2011-9)
- 河合俊雄: 『概念の心理療法』, 日本評論社, pp18-148. 1998.
- 河合隼雄: 『河合隼雄著作集 第2期 第6巻 神話と日本人の心』, 岩波書店, pp9-15. 2004.
- 川崎克哲: 「イメージと客観事実、関係性と関係項／象徴的效果／象徴と超越機能」, (臨床心理, 10 (4), pp614-617. 2010-7)
- 白川静: 『漢字百話』, 中央公論社, pp17-38. 1978.
- 成田善弘: 『贈り物の心理学』, 名古屋大学出版会, p27. 2003.
- 山中康裕: 『ハリーと千尋世代の子どもたち』, 朝日出版社, pp80-91. 2002.

## ENGLISH SUMMARY

### A study of the relationships that arise out of gift-giving

KANEKO Ryota

In this paper, the relationships arise out of gift-giving. In modern clinical psychology, everything is associated with the relationships between people. It can be said that mental illness is a disorder in relationships with others. This has been indicated in modern pathology as a “disease of loss of relationships” by Kawai (2004). He also considers the loss of relationships as a counterpart to the loss of myth. “Relationships” signifies not only relationships with others, but also the primitive foundation of a sense of belonging or identification. He points out that these foundations have weakened in modern times. And It can be said that myths as the unconscious system of empirical knowledge can also make communities which is the root of a sense of belonging or identification. So the feebleness of relationships and loss of myths are referring to the same thing. And connection with others also

inevitably declines.

Incidentally, Mauss (1925/2008) has pointed out that the gift in ancient society produces a mutually beneficial relationship. The gift in ancient times is considered as a thing that creates relationships with others. The gift is commutation of substantiality or energy and the relationship itself. The gift is intended to match opposite <self> as subject to an <other>, then <self> obtains subjective senses by produced experiences or images. At the same time, it redefines the borderline between <self> and <other>, and contributes to recognitions of identity of <self> concerned with <other> as strangeness or heterogeneity.

The gift is not only the experience of new possibility by <self> redefining, but also critical experience of the confrontation of <pain> or <death> of <self>, through the subject's losing controls when involved with <other>. In ancient culture, myths as the empirical knowledge or sense of belonging to community give significance to these <pain>. But, in modern age, the loss of myths, leaves the subject vulnerable to <pain> in the process of <self> reorganization. So in modern times, in clinical psychology the problem of <pain> has to be confronted when dealing with the loss of relationships.

*Key Words:* gift, relationships, myth, exchange, pain